

【リンクはご自由にお貼りください】

【有償配布 及び Web（ホームページ、ブログ、facebook 等）へのアップロードや転載はおやめください】

・「結婚の自由をすべての人に」東京訴訟（東京地裁）で、甲 A323 号証の証拠として提出された書面です。

陳 述 書

令和 2 年（2020）年 10 月 31 日

東京地方裁判所民事第 16 部 御中

（署名欄 略）

1 はじめに

私は、本件訴訟の原告佐藤郁夫の下の妹です。私たちは、3 人兄妹で、一番上が兄の郁夫、その下に姉がおり、私が末っ子です。兄が昭和 34（1959）年生まれで、私が昭和 45（1970）年生まれですから、兄とは 11 歳離れています。今回、兄とパートナーのよしさんが同性婚の実現を求めて国に対して裁判を起こしているということで、私から見た兄の人生や、兄とよしさんの関係性、家族としての思いなどについて、お話しさせていただきたいと思います。

2 兄の同性愛を知るきっかけや家庭内での受け止めについて

私が兄がゲイであるを知ったのは、私の記憶では昭和 61（1986）年前後のことでした。兄は既に大学を卒業して社会人になって働いており、姉は短大生、私は高校 1 年生だった頃のことです。当時、私たち家族（両親、兄、姉と私）は、東京都内で暮らしていました。兄は、優しく朗らかな性格で、友達も多く、学生の頃からよく家に友人を連れてきていました。その日も、兄の男性の友達が泊まりがけで家に遊びにきていました。翌日の朝、他の家族が出かけていない中、私は偶然、兄とその友達が玄関先で抱き合っているような体勢でいるところを見てしまったのです。兄は私に気づいてばつの悪そうな表情をし、何も言わず、2 人はごまかすように笑いながら出掛けていきました。私も何も言わなかったと思います。

私は、それまで兄が同性愛者だとは思ってもみていなかったし、そもそも同性愛のことをよく知る機会もなかったもので、思いもしない展開にとてもびっくりして、すぐにはこの出来事をどう受け止めればいいのかわかりませんでした。兄からは特に何の説明もありませんでしたが、後から思い返せば、兄は今までも何度もその友達を家に連れてきていましたし、兄とその友達が一緒に布団で寝たりしてすごく仲がよさそうだったこともあり、なんとなく「お兄ちゃんは男の人が好きなんだな」と理解しました。そのことで兄のことを嫌いになったり、兄を見る目が変わったわけではありませんでした。ただ、なんとなく自分が知ってしまったことを周りに言っはいけないような気がして、どう

【リンクはご自由にお貼りください】

【有償配布 及び Web（ホームページ、ブログ、facebook 等）へのアップロードや転載はおやめください】

・「結婚の自由をすべての人に」東京訴訟（東京地裁）で、甲 A323 号証の証拠として提出された書面です。

すればいいのかわからず悩んでしまい、しばらく家族にも他の誰にも言えませんでした。

それからしばらく日が経ってから、姉に自分が見た兄と友達のことを話し、姉から母にも話がたって、兄が同性愛者であることは姉と母の知るところとなりました。母はショックを受けたようで、兄に「私の育て方が悪かったのかしら」と言ったそうです。母は、父は受け止められないだろうと考えたようで、父には兄がゲイであることを言わなかったようです。言わないまま、昭和62（1987）年、私が高校2年生のときに、母は他界しました。

母が亡くなった後も、兄から、家族に対して今で言う「カミングアウト」をわざわざすることはありませんでした。ただ、彼氏を家に連れてきたり、家族に会わせたりすることはよくありました。私や姉にその時交際している彼氏を紹介してきて、その彼氏も一緒に食事をしたことも何回かありました。そういう意味では、兄は家族に対しては比較的オープンに行動していたと思います。姉や私が実家を出た後に、当時の彼氏がしばらく実家に住んでいたこともありました。その時は、父、兄とその彼氏の3人暮らしです。彼氏がお飯をつくって3人で食べたりもしていたようです。父は平成8（1998）年に他界しましたが、生前、はっきりとは言葉にして言うことはなかったけど、兄がゲイであることをなんとなくわかって、受け止めて見守っていたのではないかと思います。

兄から家族に対してのはっきりとした説明やカミングアウトはありませんでしたが、言葉にしなくてもなんとなく、家族の間では、既成事実化している、という感じでした。少なくとも、私自身は、兄が兄であることをありのままに受け止めていたし、今でもそうです。父や母がそれぞれどう受け止めていたかは、はっきりと語ることはないまま亡くなったのでわかりませんが、強く拒絶の言葉を口にするにはなかったと思います。姉は、姉なりの葛藤を持ってきたように感じるころもありますが、それでも兄が同性愛であること自体を責めるようなことは言ってこなかったと思いますし、今では兄とよしさんの関係を受け入れ、よしさんも家族として接しています。

3 社会の中で

このように、家族の間では、なんとなくの流れで徐々に兄がゲイであることが共通認識となっていきましたが、家庭の外に対しては、話が別です。オープンに兄がゲイであることを周囲に話すのはとても難しいことだと感じてきました。

例えば、親戚と接する機会があるときに、兄が結婚していない、連れ合いがいないという前提での会話に、話を合わせてあいまいにして濁していました。あるいは、私は自分の職場の同僚との間で兄の話が出ることはあっても、兄がゲイであることについて触れる話をしたことはありませんでした。

10年くらい前までは、お兄ちゃん結婚しないの？と聞かれると、はぐらかすしかなくて、嘘をついているような、後ろめたい気持ちを感じていました。職場では、悪気なく日常会話の中で、「おかま」がどうか、同性愛を揶揄するような会話がなされること

【リンクはご自由にお貼りください】

【有償配布 及び Web（ホームページ、ブログ、facebook 等）へのアップロードや転載はおやめください】

・「結婚の自由をすべての人に」東京訴訟（東京地裁）で、甲 A323 号証の証拠として提出された書面です。

もあり、それを聞くたびに悲しい気持ちになりました。兄のことをありのままを話せば、どういう反応が返ってくるのかわからないし、そのことでいやな思いをしたり、兄が傷つくようなことになるかもしれない、といううっすらとした危惧があり、言わないですむなら言わないでおく、という選択をとってきたのだと思います。

4 兄とよしさんのこと

私がよしさんを知ったのは、平成15（2003）年頃、兄とよしさんが交際し始めて割とすぐに、兄が私たち姉妹に今の彼女だよと紹介してきて、一緒に居酒屋で飲んだのが最初でした。すぐによしさんが穏やかな優しい性格の人だと感じ、よしさんと一緒にいる兄がとても幸せそうでした。兄もとうとういい人と巡り会えて、本当によかったな一と思いました。

そんな中、平成22（2010）年、兄からNHKのEテレ「ハートネットTV」に顔出しで出演しようと思っているという話がありました。姉は、兄が顔と名前を出してテレビでゲイであることを広くカミングアウトすることには、後ろ向きな反応を示しました。周囲の反応によって、兄たちが傷つくことになったり、私が職場などで嫌な思いをしないかといったことを心配していたのだと思います。私は、顔や名前を出して出演することに賛成しました。当時、兄は既によしさんと出会って仲良く付き合っていて、私もそれを心からよかったなあと思えていましたし、本来同性愛者であることを恥じたり隠したりする必要はなく、兄がそう決めたならそれでいいと思えていたからです。ただ、内心では、兄がオープンにすることで独身の私も同性愛者じゃないかと勘ぐられたりするのは嫌だなと、ちらっと考えてしまったことも事実です。兄を応援すると言いつつ、「自分は違うのに」と思うというのは、結局私自身も同性愛者を差別してるんじゃないかと、自分に対して腹が立ったり、何か偽善者のような後ろめたい気持ちになったりもしました。今では、性別なんて関係なく人間対人間で男でも女でもそれ以外でも、恋愛だけに限らず人を好きになるのは自由だし、素敵なことなんだと迷いなく言えるのですが、そこに至るには、私の中にも多少の葛藤があったのだと思います。

結局兄は、顔と名前をオープンにしてハートネットTVに出演しました。私自身には、この番組のことで、周りから兄が出ていたのをみたよ、ということを言われたり、何か反響があったということは起きませんでした。

平成25（2013）年、兄とよしさんが名古屋のイベントで結婚式を挙げました。私と姉も参加しました。そこにいた大勢の人から祝福される2人を見て、私は、本当に晴れやかで、幸せな気持ちになりました。2人が伴侶であるということを、周りに受け止めてもらい、祝ってもらえること、家族を家族として認めてもらえることは、こんなにうれしいことなのだ、知りました。そして、たくさんのLGBTQの方がいて、そしてそれを応援してくれる方もたくさんいるんだということを知って驚きましたし、すごくうれしくて感動しました。この結婚式を通して私は、「ああ、私たちは、ずっとこん

【リンクはご自由にお貼りください】

【有償配布 及び Web (ホームページ、ブログ、facebook 等) へのアップロードや転載はおやめください】

・「結婚の自由をすべての人に」東京訴訟 (東京地裁) で、甲 A323 号証の証拠として提出された書面です。

なふうに、お兄ちゃんとしさんを祝福し、周りにも 2 人のことを受け入れてもらいたいと願っていたんだな」ということに気づきました。兄がテレビなど公に顔を出して活動することについては後ろ向きな反応を示していた姉も、この時はとてもうれしそうにしていました。

兄とよしさんは、ここ 17 年間、本当に仲むつまじく、共に生活をしてきています。よしさんとの生活が、兄を支えてくれているのだと思います。私と姉も、兄・よしさんと一緒に外食したり、温泉旅行に行ったり、毎年お盆に佐藤家のお墓参りに行って帰りに一緒に飲んだりしています。よしさんは、兄の大切なパートナーであるとともに、私にとってももう大切な家族の一員になっています。兄には持病がありますが、よしさんが兄のそばにいてくれることで、安心感があります。

よしさんがいてくれるようになって、ここ 10 年くらいで、私も、少しずつオープンに兄とよしさんのことを周囲に話ができるようになってきました。

5 同性同士の結婚について

日本では、まだ同性同士の結婚が認められておらず、法的に家族となることができません。

今のままでは、兄とよしさんは、お互いに相続人にはなれません。また、持病を抱える兄に万一のことがあったときに、病院などでちゃんとよしさんを家族として扱ってもらえるのだろうかとの心配も消えません。

私も、周囲の人からお兄さんは結婚していないの？と聞かれたとき、兄とよしさんのことを言いづらいつ感じてきました。それは、結婚という形をとることが認められていないからだだと思います。兄がもし誰か女性と連れ添ったならば、私たち家族も自然に周囲にもそんな話をしたでしょうに、ただ連れ添う相手が同性であるというだけで、結婚はできないし、周りにも関係性を話しづらいつ、説明しづらいつ、だから話さずにすむなら触れずにやり過ごしてしまう、という状況があると思います。

私たちも、実際、親戚にも、兄によしさんというパートナーがいるということをお話することができずに来ました。親戚の集まりでも、兄は「独身の郁夫」として扱われます。例年お盆に私たち兄妹が両親の入るお墓にお墓参りに行くときは、よしさんも一緒に行ってくれますが、お墓を守ってくれている親戚のおばさんには、よしさんを紹介しないままにしてきました。私たちがお墓参りの後におばさんのところにご挨拶に寄るときは、よしさんは行かずに、ひとりで車の中で待っていました。

兄とよしさんは、互いを伴侶として一緒に仲良く暮らしています。それなのに、結婚という選択肢が得られないことで社会に家族と受け止めてもらえないのは、非常に理不尽です。同性同士の結婚が認められていない社会のままでは、どうしても同性愛者やその家族は、「話さなくてもすむ場では極力話さない、触れない」という行動になりがちです。家族を家族として扱えないことは、苦しいことです。そして、話さない、話せない

【リンクはご自由にお貼りください】

【有償配布 及び Web（ホームページ、ブログ、facebook 等）へのアップロードや転載はおやめください】

・「結婚の自由をすべての人に」東京訴訟（東京地裁）で、甲 A323 号証の証拠として提出された書面です。

ということは、相手には「いることが見えない」ということです。最近、議会で「LGBT が法律で守られているという話になれば足立区は減んでしまう」などと発言した足立区議が話題になりましたが、その区議は「自分のまわりには LGBT はまったくいないし、会ったことがない」と言っていたそうです。いないんじゃない、会ったことがないんじゃない、見えていないんです。本人たちも家族も、話せないから、存在を知ってもらえない。同性カップルが結婚できないという制度は、同性愛への差別を固定化し、助長しているのだと思います。

6 おわりに

兄たちは、今回、国に対する訴訟を起こすという形で、現状を変えるために行動することを決断しました。オープンにしている兄だからこそ、たくさんの同性愛者の皆さんのためにできることがある、それがこの訴訟なんだと思います。私は、その決断を、応援しています。

これまでは親戚に兄の同性愛のことを話したことはありませんでしたが、令和元（2019）年の夏に兄とよしさんと姉の3人でお墓参りに行った際、いつものように親戚のおばさんの家にご挨拶に寄ったところ、おばさんから「この間テレビ見たわよ！びっくりしちゃったわ！」とうれしそうに言われたそうです。おばさんは、テレビで兄の裁判のニュースを見たそうで、帰り際に車のところまで見送りにきて、よしさんが車の中で待っているのに気づいたおばさんは、「気づかなかった。一緒にあがってもらったらよかったのに」と言って、姉が「兄の彼です」と紹介したら、「よかった、よかった」と笑顔で言っていたそうです。姉がこの時のことをうれしそうに話してくれ、私も、どこか同性愛のことは年配の方には理解されづらいと思いこんでいた節があったのですが、このおばさんの話を聞いて、決めつけずに話してみると意外とわかってもらえることもあるんだなと思いました。同性同士での結婚が当たり前になれば、兄、よしさんやその家族である私たちも、周りにももっと2人のことを遠慮なく話せるようになると思いますし、周りも自然と2人が家族であることを当たり前のように受け入れていくようになると思います。制度が変わることで、社会が変わり、人も変わっていくのだと思います。

兄とよしさんは、私たちの大切な家族です。国には、他の共に暮らすカップルと同じように、兄とよしさんを法的にも家族であると、認めて欲しいです。それが、家族としての願いです。

以 上